



Title	『逢坂越えぬ権中納言』注解
Author(s)	後藤, 康文; Goto, Yasufumi
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 166, 53(右)-85(右)
Issue Date	2022-03-18
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.166.r53
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84489
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_166_Goto.pdf



『逢坂越えぬ権中納言』 注解

後 藤 康 文

一 ― 揺蕩う恋情 ―

【本文】（底本＝高松宮本）

五月待ちつけたる花橋たちばなの香も、昔の人恋しう、秋の夕べにも劣らぬ風にうちにはひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、山時ほと、きす鳥も里馴れて語らふに、三日月の影ほのかなるは、折からしのびがたくて、例の宮わたりにおとなはまほしうおぼさるれど、「かひあらじ」とうち嘆かれて、「あるわたりの、なほ情けあまりなるまで」とおほせど、そなたはもの憂きなるべし。「いかにせむ」となかめ給ふほどに、

「内裏うちに御あそびはじまるを、ただ今参らせ給へ」
とて、蔵人の少将参り給へり。

「待たせ給ふを」

などそそのかし聞ゆれば、もの憂ながら、

「車さし寄せよ」

などのたまふを、少将、

「いみじうふさはぬ御けしきのさぶらふは、頼めさせ給へる方のうらみ申すべきにや」

と聞ゆれば、

「かばかりあやしき身を、うらめしきまで思ふ人はたれか」

などいひかはして、参り給ひぬ。

こと 琴、笛など取り散らして、調べまうけて待たせ給ふなりけり。ほどなき月も雲隠れぬるを、星の光にあそばせ給ふ。

この方つきなき殿上人などは、ねぶたげにうちあくびつつ、すさまじげなるぞわりなき。

【注解】

○五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人―五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（『古今集』夏・よみ人しらず）に拠る表現。話は五月三日の夕暮れ時からはじまる。○恋ひしう、秋の夕べにもおらぬ風―恋しさも秋の夕べにおとらぬは霞たなびく春のあけぼの（『和泉式部続集』）に拠る表現。○山時鳥も里馴れて―あしひきの山時鳥里馴れてたそかれ時に名のりすらしも（『拾遺集』雑春・大中臣輔親）に拠る表現。○三日月の影ほのかなる―参考「暮れはてむ空をばしばし三日月の影ほのかなる名残りをぞ思ふ」（千五百番歌合・源通光）「さらぬだに影ほのかな

る三日月の心細くも木の間漏るかな」「為忠家後度百首」・藤原為盛)など。○ただ今参らせ給へ―底本ほか「た、いまいらせたまへ」。「ま」の下の踊り字が欠落したものとみて、三手文庫本等によりこれを補った。○蔵人の少将―蔵人で近衛の少将を兼任する若者。職掌上帝の使者として出向いたわけだが、主人公中納言とはかねてより昵懇の間柄であることがわかる。なお、この人物は冒頭部で登場したあと、翌日の管弦の場面までしばらくの間姿を見せない。○車さし寄せよ―中納言は、自家の牛車を用意するよう命じたのである。おそらくは馬でやって来たであろう蔵人の少将も、これに同乗して参内する。○ほどなき月―「三日月」であるから、日没後まもなく沈む。ここでは、その前に雲に隠れてしまったというのである。○この方つきなき殿上人―この方面の適性を欠いている、すなわち、楽器の演奏が得意でない殿上人。当然のことながら、名手が集う今宵の催しに加えられることはなく、退屈至極なのである。なお、底本ほか「このかたつきなく殿上人」とあるが、三手文庫本等により改めた。「つきなき」に「月無き」折しもの意を掛けたことば遊びが仕掛けられている点に注意。

【現代語訳】

五月(の到来)を待つて咲いた橋の花の香につけても、(昔の)人恋しく、(その香が)秋の夕べにも劣らない(ほど恋情を掻き立てる)風に(乗って)さっと匂い来たのは、おもしろくも、(また)しみじみともおのずから思い知られるのに、(加えて、)山時鳥が(すでに)人里に馴れて(盛んに)鳴く時分に、三日月の光がほのかである情景は、(物思う)折しも堪えがたくて、例の宮邸に出かけたくお思いになられるけれど、「(所詮)無駄足だろう(なあ)」とふつとため息が漏れて、「ある方で、相変わらず暑苦しいほど愛情深い(方の)所まで」と(も)お思いになるが、そ

ちらは何となく気乗りがしないらしい。「どうしよう」と物思いに耽っていらっしやるうちに、

「宮中で御前の管弦がはじまるので、すぐさま参内なさいませ」

と聞いて、蔵人の少将が参上なさった。

「(帝が、あなたのお出でを) お待ちあそばしているので」

などと催促申し上げるので、気は進まないものの、

「牛車を(こちらへ) 着けなさい」

などと指示なさるのを(聞いて)、少将が、

「はなはだ不本意なご様子がうかがえますのは、(今夜ご来訪を) 約束なさった方が(すっぱかされた)とお恨み申し上げることになるからでしょうか」

と申し上げると、

「これほどみすばらしい私を、恨めしいとまで思う人は(いったい) 誰がおりましようか」などと冗談を交わして、(内裏に) 参上なさった。

(帝は、) 弦楽器や管楽器の類を(清涼殿の庭に) 惜しげもなく配置して、(すでに) 調律を終え準備万端整えてお待ちになつていたので(ただでさえ出ている) 間もない月も(早々と) 雲に隠れてしまったので、星の光(の下) で合奏なさる。音楽の素養がない殿上人などは、(この催しに加わることもないため) 眠そうにあくびを繰り返し、(いかにも) 退屈な様子であるのが、(不謹慎だが) どうにもしようがない。

【余説】

一篇は、盛夏五月、橋の花薫る夕暮れの情景からはじまるが、引歌を連鎖させる格調高い起筆法は、後の『狭衣物語』を想起させる、この時期この文化圏ならではの技巧といえよう。

この冒頭場面で揺蕩う恋情に苛まれていた折しも参内を余儀なくされた主人公が、表題の「中納言」その人であることは、次節になってようやく、そしていきなり明らかにされる。これも、平安後期物語の特徴である。

二 —— 二人の方人 ——

【本文】

御あそびはてて、中納言、中宮の御方にさしのぞき給ひつれば、若き人々、心地よげにうち笑ひつつ、

「いみじき方人参らせ給へり。あれをこそ」

などいへば、

「何ごとせさせ給ふぞ」

とのたまへば、

「明後日、根あはせし侍るを、いづ方にか寄らむとおほしめす」

と聞ゆれば、

「あやめも知らぬ身なれども、引き取り給はむ方にこそは」

とのたまへば、

「あやめも知らせ給はざなれば、右には不用ふようにこそは。さらばこなたに」

とて、小宰相の君、押し取り聞えさせつれば、御心も寄るにや、

「かうおほせらるる折も侍りけるは」

とて、にくからずうち笑ひて出で給ひぬるを、「例の、つれなき御けしきこそわびしけれ。かかる折は、うちも乱れ給へかし」とぞ見ゆる。

右の人、

「さらば、こなたには三位の中将を寄せ奉らむ」

といひて、殿上呼びにやり聞えて、

「かかることの侍るを、『こなたに寄らせ給へ』と頼み聞ゆる」

と聞えさせれば、

「ことにも侍らぬ。心のおよばむかぎりこそは」

と頼もしいのたまふを、

「さればこそ。この御心は、底ひ知らぬこひぢにも下り立ち給ひなむ」

とかたみにうらやむも、宮はをかしく聞かせ給ふ。

【注解】

○明後日―底本ほか「あさくた」、「くた」は「て」からの転化本文と認められるため、二手文庫本等により改訂した。
○し侍るを―底本ほか「侍しを」。元来「し侍」とあった本文が、上下転倒して「侍し」に変容した経緯が容易に見透かせる。ゆえに、今改めた。○いづ方にか寄らむ―底本以下多くの伝本で「いつかたにかよからむ」に作る。「よからむ」の「か」は直前の「か」に惑わされた衍字とみて、今これを削除した。○あやめも知らぬ―時鳥鳴くや五月の菖蒲草あやめも知らぬ恋もするかな（『古今集』恋一・よみ人しらず）に拠る文飾で、中納言の人知れぬ恋の懊悩を暗示している。○引き取り―引くは「菖蒲」の縁語表現。○小宰相の君―左方のリーダー。中納言の愛人であることが、以下の記述から判明する。○押し取り―無理やり奪い取るの意だが、中納言が先に用いた「引き取り」との言語遊戯的対応に注意。○およばむ―底本以下多くの伝本が「おもはむ」に作る。低部批判の立場を優先させるならば、そのまま「思はむ」の意となるが、心が「思ふ」という表現はいかにも不自然である。よってここでは、二手文庫本等により「も」を「よ」に改めた。「与（よ）」が「毛（も）」に誤られたのであろうか。参考「まして心の及ばむに従ひては、何ごとも後見きこえむとなん思うたまふ」（『源氏物語』漂標巻）「はかばかしからずとも、心の及ばむかぎりは後見きこえはべらむ」（『夜の寢覚』巻二）「御贈物ども、御心のおよばせたまふかぎりせさせたまへり」（『栄花物語』こまくらべの行幸）など。○こひぢ―「小泥」に「恋路」の意を響かせる。

【現代語訳】

（帝が主催された）管弦（の催し）が終わって、中納言が、（ご姉妹である）中宮のお部屋にお立ち寄りなさると、

(お付きの) 若い女房たちが、愉快そうにどっと笑いながら、

「(あら) すばらしい援軍が参上なさいましたわ。ほかならぬあの方を(お仲間)」
などというので、(中納言が)

「(いったい) 何の行事をなさるのです」
とおっしゃると、

「(実は) 明後日、(中宮様の御前で、菖蒲の) 根合をするのですが、(あなた様は、左右) どちらの陣営に加勢な
らうとお思いですか」

と申し上げるので、

「物事の道理も弁えない(浅はかな) 私ですけれども、(それでもあえて) 引き受けようとお思いの側にこそ(加え
ていただきますでしょうか)」

とご返答なさると、

「物事の道理もご存じないというお話ですので、右方には必要ないに決まっていますね。でしたら、こちらに」

といって、小宰相の君が、強引に味方にし申し上げたところ、(中納言の) お気持ちも(以前から小宰相の君に) 傾い
ているのだろうか、

「(こう(好意的に)) おっしゃる時もあったのですね」

といつて、奥ゆかしくふふつと笑ってご退出なさるので、(若い女房たちの目には、そのご様子が)「いつもどおりの、
無関心なご態度ときたら、まったくがっかりだわ。こうした機会には、少しははめをおはずしなさいませよ」とばか

り見える。

(さて、) 右方の女房は、

「それならば、こちらには三位の中将を(方人として)お(呼び)寄せ申し上げましょう」

といって、殿上の間に呼びに(使者を)さし向け申し上げて、

「このような催し事がありますので、『後生ですから、こちらにお味方くださいませ』と(あなた様に)おすがり
申し上げるしだいです」

と言上させたところ、

「お安い御用です。(私の)考えが及ぶかぎりのご助力は是非(いたしましょう)」

と頼もしくおっしゃるので、

「予想どおりですわ。この(三位の中将の情熱的な)御心は、底知れぬ泥(の中)、いいえ恋の路にだつてきつと下
り立たれることでしょう」

と(左右が)お互いに羨むのも、中宮はおもしろくお聞きあそばす。

【余説】

左方は中納言、右方は三位の中将をそれぞれの方人として、中宮付きの女房たちの間で菖蒲の根合が行われる運びとなる。この両貴公子は好敵手とおぼしく、その造型には『源氏物語』の光源氏と頭の中将の關係が色濃く影を落と
している。場面としては藤壺中宮の御前で催された「絵合」が直ちに想起されるところだが、それはそれとして、

以下、物語は二人のキャラクターを絶妙な筆致で実に巧みに描き分けて行く。

三 — 根合の顛末 —

【本文】

中納言、さこそ心に入らぬけしきなりしかど、その日になりて、えもいはぬ根ども引き具して参り給へり。小宰相の局にまづおはして、

「心幼く取り寄せ給ひしが心苦しきに、若々しき心地すれど、安積の沼をたづねて侍り。さりとも、負け給はじ」とあるぞ、頼もしき。いつの間に思ひ寄りけることにか、いひ尽くすべくもあらず。

三位の中將おはしたんなり。

「いづこや、いたう暮れぬほどぞよからむ。中納言はまだ参らせ給はぬにや」と、まだきにいどましげなるを、少將の君、

「あな、をこがまし。御前こそ、御声のみ高くて遅かめれ。彼は、しのめより入りゐて、ととのへさせ給ふめり」などいふほどにぞ、かたちよりはじめて、同じ人とも見えず、はづかしげにて、

「などてか。この翁、ないたういどみ給ひそ。身も苦し」

とて歩み出で給へる、御年のほどぞ、二十に一二ばかり余り給ふらむ。

「さらば、とくし給へかし。見侍らむ」

とて、人々参りつどひたり。

方人の殿上人、心々に取り出づる根のありさま、いづれもいづれも劣らず見ゆる中にも、左のは、なほなまめかしき^けきさへ添ひてぞ、中納言のし出で給へる。あはせもて行くほどに、「持にやならむ」と見ゆるを、左のはてに取り出でられたる根ども、さらに心およぶべうもあらず。三位の中将、いはむかたなくまもり給へり。「左勝ちぬるなめり」と、方人のけしき、したり顔に心地よげなり。

【注解】

○根ども引き具して―菖蒲の根を擬人化した表現。「引き」には菖蒲を引つ張つて抜く意が掛かる。○いひ尽くすべくもあらず―底本以下現存諸本すべて「いひすくすへくもあらず」の本文。しかしながら、「いひすくす」||「いひ過ぐす」では意味上明らかに不都合であり、原形は「いひつくす」||「いひ尽くす」であつたとみなければならぬ。仮名の「徒(つ)」が「須(す)」に間違われ結果、このような転化本文が生じたのだろう。「いひ尽くすべくもあらず」なし「いひ尽くすべくもあらず」は、筆舌に尽くしがたい様子の定型表現。参考「祭、祓、修法など、言ひつくすべくもあらず」(『源氏物語』夕顔卷)「道のほどをかしうあはれなること、いひつくすべくもあらず」(『夜寝覚』卷三)など。○三位の中将―底本はじめつくしう、らうたげなるさまなど、言ひ尽くすべくもあらず」(『夜の寝覚』卷三)など。○三位の中将―底本はじめ諸本文は「みきの少将」。そしてこの箇所には、そのまま「右の少将」と読む立場と、「少」は「中」の誤りとみて改訂を加え、「右の中将」と読む立場とが従来ある。通説といえる後者に従えば、前日右方の方人となることを快諾した三位の中将にあえて別の呼称を用いたことになり、また、現存本文に忠実な前者に拠れば、三位の中将とは別の方

人「少将」がここで突然登場したことになるわけだが、いずれの解釈も不自然極まりない。「三ゐ(三居)」「みき(三支)」かつ「少」↓「中」の誤写を想定して本文を改めたゆえんである。先に姿を現した左方の方人「中納言」に対し、遅れてやって来た右方の方人は三位の中将を描いて他になく、その彼はあくまで、「三位の中将」と呼ばれねばならないはずなのである。○おはしたんなり―「なり」は聴覚による推定の用法。声や物音に因って誰が来たかがわかるのである。三位の中将の騒々しさを婉曲に表現。○まだきに―底本ほか「まだきす^に」。す(須)は「に(仁)」の誤写。三手文庫本等により改めた。○あな、をこがまし―以下、相手を軽くたしなめる遠慮のない口調からして、右方のリーダー少将の君が三位の中将の愛人であることが推察される。○などてか―相手の発言内容を強く打ち消す反語表現。底本ほか諸本「なと、よ」に作るが、このまま「などしよ」では文法的に説明できず解釈不能であるため、「よ(よ、与)」を「てか(天可)」の誤りとみて本文を改訂した。参考「などてか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなん」(『源氏物語』空蟬卷)「などてか。かくのみこそ。さるべき法文など習ひきこえさせたまふとて」(『夜の寝覚』卷四)など。なお別解として、「か(可)」「よ(よ、与)」の誤写を想定し、本文を「なか」に改めることも考えられる。○この翁―この年寄り相手に、の自嘲だが、もちろん冗談である。「翁」だから「身も苦し」という理屈が成り立つ。○方人の殿上人―中納言と三位の中将の二人を指す。○さらに心およぶべうもあらず―前出の三位の中将のことは「心のおよばむかぎりこそは」に呼応する表現。中納言が満を持して取り出した最後の根は、三位の中将の「心のおよぶ次元をはるかに超越していたのである。○左勝ちぬるなめり―左方の勝利が決定的となったようだ、の意。この「ぬる」は、じきにそのような状態になることが確実な場合に用いる未来完了の用法。○方人のけしき―競技者の様子は、の意。この「方人」は、中納言ではなく、根合の当事者である小宰相以下左方の女房たちを指した表現。

【現代語訳】

中納言は、あれほど気乗りのしない様子だったにもかかわらず、(根合)当日になって、ことばで表現できない(ほど)にすばらしい菖蒲の) 根たちを引き連れて参上なさった。小宰相(の君)の部屋にまずお出でになって、

「(昨日、あなたが) よくもお考えにならず、(私を左方の方人として) お引き入れなさったのが気の毒でしたので、(われながら) 年甲斐もない気がしましたが、(遙々) 安積の沼を探訪し(名高い菖蒲を引いて参り) ました。(ですから、) いくら何でもお負けになることはないでしょう」

と(の力強いことばが) あるのも、何より頼もしい。(安積の沼の菖蒲とは、いったい) いつの間に着想されたことなのか、(中納言が持参した根はすべて絶品で、まこと) 筆舌に尽くしがたい。

(遅れて、) 三位の中将がいらしたようだ。(開口一番)

「(根合の場所は) どこですか。すっかり日が暮れないうち(に始めるの) がよいでしょう。中納言は、まだ参上なさっていないのでしょうか」

と、まだ競技開始前だというのに鬪志剥き出しであるのを、(右方の) 少将の君が、

「ああ、馬鹿らしい。(そうおっしゃる) あなた様こそ、お声ばかりが大きくて(お出でになるのが) 遅かったようですわ。あちらは、(早くも) 夜明け方から(小宰相のお部屋に) お入りになって、(ご用意された根の) 仕上げを
していらつしやるようです」

などといっている丁度その時、容姿をはじめとして、同じ人間とも見えず、(実に) 立派なご様子で、

「どうして(そんなことがありましょうか)。この老骨(相手)に、(そ)う ひどくお張り合いませんな。からだ

も（不自由で）辛い（ことです）」

と歩いて歩いてお出ましなされた、（中納言の）ご年齢は（という）、（その実）二十歳を（わずか）一二歳ほど過ぎていらつしやる（程度な）のだろう。（すると、）

「（お二方ともお揃いになったのね。）それならば、（ぐずぐずしないで、根合を）早くなさいませよ。（ひとつ）見物いたしましょう」

と、女房たちが参集した。

方人の殿上人（お二人）が、思い思いに取り出す（菖蒲の）根のありさまは、どちらもどちらも劣らず（すばらしく）見える中でも、左方の（根）は、（見事なうえに）やはり優美な気品までもが加わって、中納言が拵えなされた（のであった）。番数がだんだんと進んで行くにつれて、「（この勝負、さては）引き分けになるのだろうか」と見えたのだが、左（方）の最後に取り出された根たち（のすばらしさ）は、まったく想像することもできない。三位の中将は、（さすがに）ことばを失って、（ただひたすら、敵方の絶品を）見つめて座っていらした。「（これで）わが方の勝利は決定的となったようだ」と、（左方の）競技者たちの様子は、得意げで気分よさそうである。

【余説】

いよいよ根合当日を迎えた。余裕綽綽で悠然と構える中納言と性急で闘志も露な三位の中将の様子が、まずは対比的に描き出されておもしろい。

さて、根合の勝負は伯仲したまま進行するが、「かたちよりはじめて、同じ人とも見えず、はづかしげ」な中納言が

用意した左方最後の根は想像を絶する逸品で、「なほなまめかしき気さへ」加わっていたのであった。そして、その点こそが三位の中将が準備した右方の根との決定的差異となり、左方の勝勢が揺るぎなくなったわけであるが、これは同時に、二人の貴公子の「決定的差異」をも意味するものでもあった。

四 — 歌合の顛末 —

【本文】

根あはせはてて、歌の折になりぬ。左の講師左中弁、右のは四位の少将。よみあぐるほど、小宰相の君など、「いかに心尽くすらむ」と見えたり。

「四位の少将、いかに。臆すや」

とあいなう、中納言うしろみ給ふほど、ねたげなり。

左、

君が代のながきためしにあやめ草千尋にあまる根をぞ引きつる

右、

歌脱

〔中納言、〕

なべてのとたれか見るべきあやめ草安積の沼の根にこそありけれ

とのたまへば、中将、

「さらに劣らしものを」

とて、

いづれともいかがわくべきあやめ草同じ淀野に生ふる根なれば

とのたまふほどに、うへ聞かせ給ひて、ゆかしうおほしめさるれば、しのびやかにて渡らせ給へり。宮の御覧する所に寄せ給ひて、

「をかしきことの侍りけるを、などか告げさせ給はざりける。中納言、三位など、方わかるるは、たはぶれにはあらざりけることにこそは」

とのたまはずれば、

「心の寄る方のあるにや、わくとはなけれど、さすがにいとましげにぞ」

など聞えさせ給ふ。

「小宰相、少将がけしきこそいみじかめれ。いづれ勝ち負けたる。さりとも、中納言負けじ」

などおほせらるるや、ほの聞こゆらむ、中将、御簾の内うらめしげに見やりたる尻目も、らうらうじく愛敬つき、人よりことに見ゆれど、なまめかしうはづかしげなるは、なほたぐひなげなり。

【注解】

○四位の少将、いかに。おくすや—この部分、直後の「あいなう」の解釈とも連動して中納言の発言とも取れるよう

に思うが、今は従来どおり、右方の女房（おそらくは少将の君）の台詞とみておく。○君が代—ここでは、主人である中宮の寿命をいう。○右、**歌脱**〔中納言、〕—「右」に「なべてのと」歌が直結する現存本文に依拠するかぎり、以後解釈不能と断じてよい問題箇所である。よつてここでは、「右」のあとに本来存在した右方の一番歌と「なべてのと」歌の詠主表記「中納言」までが最低限脱落したものと同断した。「右」まで写してきた書写者某の筆が、中納言の「なべてのと」歌へとうっかり飛んでしまい、その間に不慮の脱文が生じたと同断されるのである。○中将—底本以下諸本「少将」に作るが、中納言に相對する人物は三位の中将以外にない。よつて、「少」を「中」の誤りとみて改めた。○おぼしめさるれば—底本ほか「おほしめさ^るれば」。、「は」は明らかに「る」の誤写。三手文庫本等により改めた。○心の寄る方—底本ほか諸本文「心によるかた」。今、「に（爾）」は「の（乃）」の誤りとみて改めた。「の」は主格を表す格助詞で、ここは、（二人それぞれに）心が惹かれる（女房のいる）側、の意。参考「誰も心の寄る方のことはさなむあると思ひたまへなしつつ」（『源氏物語』手習卷）など。○少将—底本以下すべての伝本で「中将」とあるようだが、上の「小宰相」との対比からして、ここは右方の領袖「少将」とあるべきところ。ゆえに、先の「中将」の場合とは逆に、「少」↓「中」の誤写と判断し本文を改訂した。○中将—底本以下諸本「少将」。現存伝本においては、本作中の漢字「中」と「少」とが、まるで作爲があるかのように入れ替わっている。ここももちろん「中将」の誤りで、三位の中将を指す呼称とみなければならぬ。○なまめかしうはづかしげなる—前節の【余滴】でも触れたとおり、「なまめかし」と「はづかしげなり」の二語は、本作中において、主人公中納言のみに賦与された天性の美質を形容するキーワードとなっている。

【現代語訳】

(さて、) 根合が終わって、歌(合)の段になった。左(方)の講師は左中弁、右(方)の(講師)は四位の少将(である)。(左の一番歌を、左中弁が) 披講する間、(作者である) 小宰相の君などは、「どれほど気を揉んでいることだろう」と(いうふう)に 見えた。(一方、右方の人々は、)

「四位の少将、どうしました。気後れしたのですか」

と味気なく、中納言が(左方を手厚く) お世話なさる間、(何とも) 悔しそうである。

左(の一番歌)、

中宮様のご長寿の証として、菖蒲の千尋にも余る根を引い(て参つ) たことです。

右(の一番歌)、

【歌脱】

〔中納言が、〕

ありふれた品だと、(いったい) 誰が見ましようか。(左方の) 菖蒲(の根) は、(何とまあ、あの) 安積の沼の根 だったのですね。

と(ぬけぬけと) おっしゃるので、(三位の) 中将は、

「(こちらの根だって、) 少しも劣っているはずはないのに」

と(癪に障つ) て、

(左右) どちら(が優れている) とどうして区別できましようか。(なぜならば、この場にある) 菖蒲は(みな)、

(安積の沼ならぬ) 同じ淀野に生えた根ですので。

とおっしゃる時分に、帝が(今日の根合のことを)お聞きあそばして、(どうしても)知りたくお思いになられたので、お忍びの体でお出でなされた。(いらっしゃるやいなや)中宮がご覧になってお近づきになって、

「おもしろい(催し)事がありましたのを、なぜ(私に)お知らせくださらなかったのですか。中納言や三位(の中將)などが敵味方に分かれる(という)のは、ただの遊びではなかった事態でしょうに」

とおっしゃるので、(中宮は、)

「(銘々)心が惹かれる側があるのでしょうか、(二人をわざと)分けたわけではないのですが、とはいえ(いざとなると、お互い)鬪志も露ですわ」

と申し上げなされる。(すると、帝が、)

「小宰相(の君)や少將(の君)の様子といたら、(まったく)ただごとではなく見えます。(ところで、いったい)どちらが勝ち(どちらが)負けたのですか。いくら何でも、中納言が負けることはありませんまい」

などとお話しになるお声が、かすかに(漏れ)聞こえているのだろうか、(三位の)中將が、御簾の中に恨めしそうに視線を送ったその流し目も、気高く魅力的で、他の(殿)方より格別に見えるけれど、(中納言の)優美で立派な天性は、何といっても比類がない様子である。

【余説】

根合終了後歌合が行われるのは慣例であるが、【注解】で指摘したとおり、この部分の現存本文には重大な欠陥＝脱

文があると考えなければならぬ。すなわち、歌合の出詠歌は、最初の「君が代の」歌のみであり、残りの二首は、根合の勝負が決着あとの、左右「方人」同士の歌による会話にほかならないのである。「なべてのと」の歌には、余裕綽綽たる中納言のそらとほけたユーモアが、「いづれとも」の歌には、憤懣やる方ない三位の中將の負け惜しみが、それぞれうまく表現されている。

五 — 根合の名残り —

【本文】

「むげにかくてやみなむも、名残りつれづれなるべきを。琵琶の音こそ恋しきほどになりたれ」

と、中納言、弁をそそのかし給へば、

「そのこととなきいとまなさに、みな忘れにて侍るものを」

といへど、のがるべうもあらずのたまへば、盤ばんじきでう渉調に掻い調べて、はやりかに掻き鳴らしたるを、中納言、たへずをかしようおほさるらむ、和琴わこん取り寄せて弾きあはせ給へり。この世のことも聞こえず。三位横笛、四位の少將拍子取りて、藏人の少將、伊勢の海うたひ給ふ声、紛れずうつくし。

うへは、さまざまおもしろく聞かせ給ふ中にも、中納言は、かううちとけ心に入れて弾き給へる折は少なきを、めづらしうおほしめす。明日は御物忌なれば、夜更けぬ前まへにとく帰らせ給ふとて、左の根の中にことに長きを、「ためしにも」とて持たせ給へり。

中納言、まかり出給ふとて、

「階はしの底もとの薔薇きょうびも」

とうち誦ずんじ給へるを、若き人々は、あかずしたひぬべくめで聞ゆ。

「かの宮わたりにも、おぼつかなきほどになりけるを」と、おとなはまほしうおぼせど、「いたう更けぬらむ」とてうち臥し給へれど、まどろまれず、

「人はものをや」

とぞいはれ給ひける。

またの日、菖蒲あやめも引き過ぎぬれど、名残りにや、菖蒲あやめの紙あまた引き重ねて、

昨日こそ引きわびにしか菖蒲草深きこひちに下り立ちし間に

と聞え給へれど、例のかひなきをおぼしなげくほどに、はかなく五月さつきも過ぎぬ。

【注解】

○なりにたれ―この箇所、底本ほか主要諸本では「なりわたれ」に作るが、内閣文庫本・李下亭文庫本等では「なりにたれ」。意味上後者の方がふさわしく、「に(爾)」「わ(王)」の誤写とみて改めた。○そのこと―「その事」に「その琴」の意を掛けた洒落。○忘れにて侍る―動詞「忘る」+完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」+接続助詞「て」+動詞「侍り」で、すっかり忘れてしまいました、の意。李下亭文庫本等「はて」とするが、不可。参考「あらじ、片方は、うち忘れにてはべるになむ」(『うつほ物語』春日詣卷)「かかる心なむ忘れにて侍る」(同沖つ白波卷)「かく見たてま

つりて後よりは、こよなく思ひ忘れにてはべる」(『源氏物語』手習巻)など。○この世のこと——この「こと」にも、「事」と「琴」の両義が掛けられている。○ためしにも——歌合左歌の「君が代のながきためしに」に呼応する表現。○階の底の薔薇も——白楽天の詩句「階底薔薇入夏開」(『和漢朗詠集』首夏)を朗詠したのである。参考「階の底の薔薇けしきはかり咲きて、春秋の花盛よりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ」(『源氏物語』賢木巻)。

○かの宮——底本以下主要諸本文は「かのとや」。李下亭文庫本等により改めた。「み(三)↓と(止)」の誤写が想定される。○「いたう更けぬらむ」とてうち臥し給へれど——もう遅くなったという理由づけをして宮邸訪問を諦めた中納言は、ここでようやく横になるのである。○人はものをや——夏の夜を寝ぬに明けぬといひおきし人はものをや思はざりけむ」(『和漢朗詠集』夏夜・柿本人麿)の第四句。参考「寝ぬに明けぬと言ひけん人もうらやましきに、からうじて明けぬる心地すれば」(『狭衣物語』巻一)。叶わぬ恋の懊悩ゆえに、中納言には夏の夜が長く感じられるのである。○引き重ね——「引き」は「菖蒲」の縁語。直前の「引き過ぎ」も同じ。○昨日こそ……下り立ちし間に——この歌は、上代からある「昨日こそ……しか」の類型を踏襲しているようだが、やや難解。五句の順序を①④⑤③②に置き換え、「昨日こそ／深きこひぢに下り立ちし間に／菖蒲草／引きわびにしか」の意に解くべきであろう。すなわち、一首全体で「昨日こそ……しか」の部分のみを言語化し、今日たちまちに襲いかかる恋の懊悩はあえて言外に込めたのである。

参考「昨日こそ早苗取りしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く」(『古今集』秋上・よみ人しらず)「昨日こそ年は暮れしか春霞かすがの山にはや立ちにけり」(『拾遺集』春・山部赤人)など。

【現代語訳】

「あっさりこうして終了してしまうのも、（解散した後で）余韻をもてあますことになるでしょうから。とりわけ琵琶の音色が恋しい時分になったことです」

と（いって）、中納言が（琵琶の名手である左中）弁に水をお向けになると、

「（取り立てて）何が（原因）ということもない（日常の）忙しさ（のため）に（練習の暇とてなく）、（琵琶の曲目も）すっかり忘れてしまっておりませんのに」

というけれど、（中納言が、到底）免れることもできそうになくおっしゃるので、（左中弁は、おもむろに琵琶を手に取り、）素早く調弦して、軽快に掻き鳴らしたのを（お聞きになって）、中納言は、我慢できず興味深くお思いになったのだろうか、（ご自身も）和琴を取り寄せて合奏なさる。（その妙なる音色は、とても）この世の音楽とも聞こえない。（さらに、）三位（の中将）が横笛（を吹き）、四位の少将が拍子を取って、藏人の少将が「伊勢の海」をお歌いになる（凜とした）声は、（器楽の音に）紛れることなく美しい。

帝は、いろいろおもしろくお聞きあそばさす中でも、中納言が、こうゆったりと気持ちを含めてお弾きになっていらっしゃる機会は少ないので、めずらしくお思いになる。明日は、（ご自身の）御物忌なので、夜が更けない前に早くお帰りになるということ、左（方）の根の中で（最後に取り出された）ひとときわ長いのを、「せっかくだから、ひとつ長寿の）証にでもしよう」とおっしゃってお持ち（帰り）あそばされた。

（そのあとで、）中納言が、ご退出なさるといふことで、

「階の底の薔薇も」

と（いう時宜になかった詩句を）さりげなく朗詠なさるお姿を、（中宮付きの）若い女房たちは、見飽き足りなく危うくついて行きそうになるくらい褒めたたえ申し上げる。

（さて、帰邸された中納言は、）

「あの宮邸にも、気がかりになるほどのご無沙汰になってしまったので」と、ご訪問なさりたくお思いになるものの、「今夜はもう）ひどく更けてしまったことだろう」と思つてふと横におなりになるけれど、（恋情に苛まれて）寝入ることがお出来にならず、

「人はものをや」

と（いう古歌の一句）をおのずと口になさった。

翌日、菖蒲（の時節）もすでに過ぎてしまったけれど、（中納言は、その）名残りというわけだろうか、菖蒲（色）の紙を何枚も重ねて、

昨日深い（沼の）泥（の中）に下り立った折に、菖蒲を引（き抜）くの難儀したばかりだといひますのに、（今日はまた、あなたへの深い恋路に足を踏み入れてしまい、何ともやりきれない思いをしていることです）。

と（したためて、思ひの文を）申し上げなされたけれど、いつもどおり手応えのない結果を思い嘆かれるうちに、何の進展もなく五月も過ぎ（去つ）た。

【余説】

公には、その美貌と優雅で悠然とした立ち居振舞い、諸道における卓越した才能により、帝の寵愛を一身に受け、

若い女房たちの心をも捉えて離さない中納言であった。けれども、彼が私に立ち返るや、叶わぬ恋に人知れず懊惱する気弱な青年の姿がたちまちにして露呈する。先に述べた中納言と三位の中將の対比の妙に加えて、中納言の「公」と「私」、「外」と「内」の鮮やかな描き分けにも、読者は十分注意しながら本作を読み進める必要があるといえよう。

六 — 夏衣の隔て —

【本文】

土さへ割れて照る日にも、袖干す世なくおぼしくづぼるる。十日余日よひの月くまなきに、宮にいとしのびておはしたり。宰相の君に消息せうそくし給へれば、

「はづかしげなる御ありさまに、いかで聞えさせむ」

といへど、「さりとして、もののほど知らぬやうにや」とて妻戸押し開け、対面したり。うちにはひ給へるに、よそながらうつる心地でする。なまめかしう、心深げに聞えつづけ給ふことどもは、奥の夷えびすも思ひ知りぬべし。

「例のかひなくとも、『かく聞きつ』とばかりの御ことのはをだに」

と責め給へば、

「いひや」

とうちなげきて入るに、やをらつづきて入りぬ。

臥し給へる所にさし寄りて、

「時々は、端つ方にも涼ませ給へかし。あまり埋もれいたきも」とて、

「例のわりなきことこそ。えもいひ知らぬ御けしき、常よりもいとほしうこそ見奉り侍れ。『ただひとこと、聞え知らせまほしくてなむ。野にも山にも』とかこたせ給ふこそ、わりなく侍る」

と聞ゆれば、

「いかなるにか、心地の例ならずおぼゆる」

とのたまふ。

「いかが」

と聞ゆれば、

「例は、ここにや教ふる」

とて、うごき給ふべうもあらねば、

「かくなむ聞えむ」

とて立ちぬるを、声をするべにて尋ねおはしたり。おほしまどひたるさま心苦しければ、

「身のほど知らず、なめげにはよも御覽せられじ。ただ一声を」

といひもやらず、涙のこぼるるさまぞ、さまよき人もなかりける。

宰相の君、出でて見れど、人もなし。「返事かへりごと聞きてこそ出で給はめ。人にもものたまふなめり」と思ひて、しばし

待ち聞ゆるに、おはせずなりぬれば、「『なかなかなかひなきことは聞かじ』などおぼして、出で給ひにけるなめり。い

とほしかりつる御けしきを、われならば」とや思ふらむ、あぢきなくうちながめて、内をば思ひ寄らぬぞ、心遅れたりける。

宮は、さすがにわりなく見え給ふものから、心強くて明けゆくけしきを、中納言もえぞ荒立ち給はざりける。「心のほどもおほし知れ」とにや、「わびし」とおほしたるを、立ち出で給ふべき心地はせねど、「見る人あらば、ことあり顔にこそは」と、人の御ためいとほしくて、

「今よりのちだにおほし知らず顔ならば、心憂くなむ。なほ『つらからむ』とやおほしめす。人はかくしも思ひ侍らとて、
とて、
じ」

うらむべきかたこそなけれ夏衣薄き隔てのつれなきやなぞ

【注解】

○地さへ割れて照る日にも、袖干す世なく―「水無月の土さへ裂けて照る日にもわが袖干めや妹にあはずして」（『拾遺集』恋三・よみ人しらず）に拠る措辞。○おほしくづほるる―本来ならば「おほしくづほる」と終止形で結ばれるべきで衍字が疑われるところが、今はいわゆる「連体止め」の筆法と見ておく。○もののほど知らぬやうに―参考「あまりもののほど知らぬやうに、さてしも過ぐしはてず」（『源氏物語』末摘花巻）「若き人々は、もののほど知らぬやうにはべるこそ」（同橋姫巻）など。○心深げ―形容詞「心深し」、形容動詞「心深げなり」は、平安後期物語の主人公を特徴づける語。○奥の夷―荒々しい東国の武士。この時期頃から、情趣を解さない者の典型として引き合いに出さ

れるようになった。参考「長月の有明の空のけしきをば奥の夷もあはれとや見む」（「久安百首」・上西門院兵衛）など。

○『かく聞きつ』とばかり―底本以下諸本「かくとき、つはかり」。このままでは不審であるため、引用の格助詞「と」の位置を正した。副助詞「ばかり」は限定の用法。参考「ただ『見つ』とばかりはのたまへ」（『平中物語』第二段）

「見き」とばかりの気色も、ほのめかさせたまはまほしけれど」（『夜の寝覚』卷三）など。○と責め給へば―底本はか「とめたまへは」。三手文庫本等により「と」の次に「せ」一字を補って解釈した。○涼ませ―底本ほか数本「すませ」。す」の下にあつた踊り字「、」の脱落を考えてしかるべき箇所であるため、他本によりこれを補った。○あまり埋もれいたきも―埋もれいたき」の部分、底本以下ほとんどの伝本が「むもれいたる」または「うもれいたる」に作るが、これを複合動詞「埋もれる」＋助動詞「たり」と考え場合、尊敬語「給ふ」の欠落が説明できない。よってここでは、「き（支）」↓「る（留）」の誤写を想定し、形容詞「うもれいたし」の連体形と解した。参考「いとあまり埋れいたきを、物越しばかりの対面は」（『源氏物語』賢木巻）「若き人のめでざらむも、いとあまり埋れいたからむ」（同明石巻）など。○わりなきことこそ―欲をいえば、「こと」と「こそ」の間に格助詞「を」がほしいところ。「こと（已止）」あるいは「こそ（已曾）」との字形相似が原因となつて、「を（遠）」一字が脱落した経緯は十分に想定可能だろう。○野にも山にも―「いづくにか世をばいとむ心こそ野にも山にもまよふべらなれ」（『古今集』雑下・素性）の第四句。参考「心こそ、野にも山にも」と言はれたまふは、いかなるべき御ありさまにか」（『狭衣物語』卷二）。○わりなく侍る―上に係助詞「こそ」があるので、結びは「わりなく侍れ」と已然形であるべきだが、しばらく底本以下主要諸本本文のまま連体形とする。○例は、「ここにや教ふる―底本ほか多くが「れいはみやにをしふる」に作る。三手文庫本等一部伝本で「れいはみに、やをしふる」とあるが、いずれも不審。「や」が疑問の係助詞であり、「教ふる」

との間に係り結びが成立している点は動かないので、「ここ」では、「ここ」(己)にや「み」(三)にや「みやに」の転化過程を想定して、本文を改訂した。参考「人見えにくきところつきたまへる人なり」など例の教へきこえたまふ」(『源氏物語 藤裏葉卷)「例は教へたまふにこそ。心さかしらあるやうにおぼすらむと、つつましくて」(『夜の寢覚』巻三)など。ただし、自称の人代名詞「ここ」の当該文脈における使用には疑問が残ろうか。参考「ここにさへ恨みらるるゆゑになるが苦しきこと」(『源氏物語 真木柱卷)「ここには、いかなる心おきたてまつるべきにか」(同若菜上卷)など。○さまよき人もなかりける―普段は優雅に振舞う天下の貴公子も、この時ばかりは格好がつかずまるで形無しだった、の意。主人公中納言に対する語り手の揶揄である。○人にももの給ふなめり―(所在ないので)女房(の誰かに)話しかけていらっしやるのだろう、の意。○心のほどもおぼし知れ―「心のほど」は中納言の苦衷。「おぼし知れ」の主語は宮。○ことあり顔―いかにも実事があつたかのような様子。参考「風すこし吹きやみたるに、夜深う出でたまふも事あり顔なりや」(『源氏物語 若紫卷)「事あり顔に朝露もえ分けはべるまじ」(同総角卷)など。○人はかくしも思ひ侍らじ―「人」は宰相の君を念頭に置いた第三者、「かく」は男女の契りを交わしていない状態と解した。強意の副助詞「しも」が「よもや」のニュアンスを醸し出す。もつともこう解く場合には、「かく」のあとにこれを受ける引用の格助詞「と」がほしいところ。

【現代語訳】

地面まで(ひび)割れて(太陽が容赦なく)照(りつけ)る日にも、(中納言は、恋の涙で濡れた)袖を乾かす暇(も)なく、意気消沈しておられる。(それでもついに意を決し、六月)十日過ぎの月が皓々と照る夜に、(例の)宮邸にた

いそう人目を忍んでいらつしやつた。(そして、宮付きの女房である) 宰相の君に言伝てなされたところ、

「(あまりに) ご立派な(中納言の) ご様子に(相對して)、(私ごときが) どうしてものを申し上げ(られ) ましよ
うか」

というけれど、「だからといって(お断わりするのは)、物事の道理を弁えないよう(な無粋な態度) だろうか」と思つて妻戸を(手で) 押し開けて、(中納言と) 対面した。(すると) その途端に、(中納言が薰きしめなされたお香の) 香気が漂いなさつて、離れていても(それが) 移る気がする。優雅に、(そして) 思慮深げに、(胸のうちを) 申し上げつづけなさる(中納言の) ことば(の趣) は、(相手が、かりに) 陸奥の蝦夷であっても、きつと身にしみてわかるに違いない。

「例によつて(たとえ) 甲斐がなくても、(今夜は) せめて、『私の思いを) こう聞いた』という程度のおことばなりとも(姫宮から頂戴したいものです)」

とお責めになるので、(宰相の君が、)

「さあどうでしょう」

とふとため息をついて(奥に) 入る(その) 後ろに、そつとつづいて(中納言も) お入りなされた。

(宰相の君は、姫宮が) 横になつておられる所に近寄つて、

「たまには、(お部屋の) 端の方になつても(お出になつて) お涼みなさいませよ。(このように) 引き籠つてばかりなのも(おからだに障ります)」

といつて、

「(実は今、中納言がお見えになっていて、)いつものようにご無理なことばかりを(おっしゃいます)。ただ私は、その)何ともいいようのない(お辛そうな)ご様子を、いつも以上に気の毒に拝見いたしました。『たったひと言だけ、(私の苦衷を)申し上げご承知いただきたくて(参上したのです)。それさえ叶うならば、後は)野になりと山になりと(姿を隠しましょう。』とお嘆きになるのが、何よりいたたまらないことです」

と申し上げると、(姫宮は、)

「どうしたのでしょうか、気分がすぐれない気がします」

とおっしゃる。(宰相の君が、)

「(お返事は)どのように(なさいますか)」

と申し上げると、(姫宮は、)

「普段は、私に(そのような)指図をしますか」

と反発して、身動きなさりそうもないので、

「(では、)このように(お返事)申し上げましょう」

と諦めて(その場を)立ったのだが、(何と中納言は、その)声を手がかりにして(姫宮の居場所を)探し求めていらっ
しゃった。(姫宮の)気が動転しておられるご様子に心が痛んだので、(中納言は、)

「身のほども弁えず、無礼な振舞いは誓ってお目にかけるつもりはありません。(私は、)ただ(あなたからの)一声
を(頂戴したいのです)」

と終いまでいうこともできず、涙が(滂沱と)こぼれる(不甲斐ない)様子ときたら、(普段あれほど)体裁のよい人

もあつたものではなかつたのだつた。

宰相の君は、(妻戸のもとに) 出て(外を) 見るけれど、人影もない。(そこで) 「(姫宮の) お返事聞いて(はじめて、中納言は) お立ち去りになるはずだ。(たぶん) 女房(の誰か) に話をしておられるのだろう」と思つて、しばらくお待ち申し上げるが、(結局) いらつしやらずじまいになつたので、

「『なまじ甲斐のない(お) ことばは聞きたくない』 などとお思ひになつて、(お返事も待たずに) お出になつてしまわれたのだろう。お勞しいご様子だ(つた) のに、(相手がこの) 私ならば(お気持ちに添いましようものを)」
とても思つているのだろうか、意味もなくぼんやりと外を眺めて、(肝心な) 内部に気が回らなかつたのが、何とも思慮不足であつた。

(姫) 宮は、そうはいつでもどうしてよいかわからないご様子をしておられるものの、毅然と(対峙) した状態で(夜) が(明けて行く) 気配なので、中納言(として) も、荒々しく振舞いなさることは到底おできにならなかつた。「(私の) 思ひの丈をどうか理解していただきたい」というつもりなのだろうか、「(このままでは) やりきれない」と思ひになつているので、(この場をあつさり) と立ち去ることがおできになる気はしないけれど、「もしも(この光景を) 見る人がいるなら、きつと何かあつたと誤解するだろう」と(思うと)、(わが身はともかく、姫) 宮のために(お気の毒) で、

「(こうしてお目にかかれた) 今からのちでさえも、(あなたが私の気持を) ご存じないご様子でいらつしやるならば、辛いことでございます。それでも、『薄情(なまま)』でいらつしやろう」と思ひになりますか。(お付きの) 女房は、よもや(私たちが) こう(潔白) だとは思ひますまい」

といつて、(次の歌をお詠みになり、後ろ髪を引かれる思いで出て行かれたのだった。)

(もとより)恨みごとをいうべきところとてないのですが、夏衣の(この)薄い隔てが相も変わらない(状態なのは、(いったい)なぜでしょうか。

【余説】

六月十日過ぎの月の明るい夜、中納言は姫宮に肉薄接近する千載一遇の機会を得たが、自らの苦衷をただ涙ながらに訴えるだけで、強硬な態度に出ることはないままに明け方を迎える。そして一篇は、そうした何とも煮え切らぬ主人公の、どこか他人事のような和歌で結ばれるのである。「さまよき人もなかりける」という語り手の評言に象徴される中納言の「公」と「私」の落差、その対比は実に巧妙だといえよう。